

レンカ・ライネロヴァーの最後のメッセージ

—— 最後の作品のドイツ語版・チェコ語版の比較 ——

佐藤 雪野

1. はじめに

現在チェコ共和国の首都となっているプラハは、第二次世界大戦以前は、チェコ、ドイツ、ユダヤの三つの文化の共生する都市であった。例えば、20世紀ドイツ文学を代表する作家であるフランツ・カフカ Franz Kafka (ユダヤ系) やライナー・マリア・リルケ Rainer Maria Rilke がプラハ生まれであったことはよく知られている。そのほかにも多くのユダヤ系、非ユダヤ系のドイツ語作家がプラハには存在した。しかし、ナチ・ドイツによるユダヤ人のホロコースト、第二次世界大戦後のドイツ系住民のチェコスロヴァキアからの追放により、その伝統はほぼ途絶えてしまった。

今のところ最後にその伝統を体現したのがレンカ・ライネロヴァー Lenka Reinerová である。彼女は、「プラハにおける最後のドイツ語で書いた作家」と呼ばれたが、2008年、92歳で亡くなった。彼女に関する研究書としては、ドイツのデュースブルク＝エッセン大学のコリナ・シュリヒト Corinna Schlicht による、ライネロヴァーを「語り手」としてとらえ、三つの時期に分けて作品を分析した博士論文¹⁾と、2009年に出版されたグドルン・サルムホーファー Gudrun Salmhofer による包括的な研究書²⁾がある。特に後者は時期別に彼女の作品を分類して特徴づけ、またテーマごとに作品のテキスト分析を試みており、現時点でのドイツ語圏におけるライネロヴァー研究の水準を示すものとなっている。しかし、ライネロヴァーの作品がしばしば出版されるようになったのは、1990年代も後半になってからであり、まだその研究は始まったばかりといわざるをえない。サルムホーファーの研究も、個別の作品の細部にまでは踏み込みきれていない。

1) *Untersuchungen zum erzählerischen Werk Lenka Reinerová*, Diss., Universität Duisburg-Essen, 2003. 同年, *Lenka Reinerová: das erzählende Werk* の表題で公刊された(発行 Oberhausen: Karl Marina Laufen)。長く品切れ状態が続いていたが、ライネロヴァーの死後、再び流通するようになった模様である。

2) „Was einst gewesen ist, bleibt in uns“: *Erinnerung und Identität im erzählerischen Werk Lenka Reinerová*, Innsbruck: Studien Verlag, 2009.

そのほかのライネロヴァーに関する文献は、稿末に掲げたような短い紹介記事が中心である。

本稿では、以上のような研究状況から、ライネロヴァーの一つの作品を取り上げ、より細かい分析を行いつつ、彼女が生涯にわたって訴え続けたメッセージを読み取することを試みる。とりあげる作品は、遺作となった『次の時の秘密 Das Geheimnis der nächsten Minuten (Berlin: Aufbau-Verlag, 2007)』である。この作品に、ライネロヴァーが最後に(最後まで)訴えかけたメッセージが現れていると考えられるからである。

また、ライネロヴァーはドイツ語作家であったが、第二次世界大戦前後の亡命時期及びユーゴスラヴィア滞在時期を除いてチェコに住み続け、プラハというチェコの町と結びつけられる存在であった。ライネロヴァー自身の民族的アイデンティティを考えると、彼女は自分自身を「ドイツ人」、「チェコ人」或いは「ユダヤ人」のどれかに属することを決定することを避けていたように思われる。例えば、「あなたの母語はドイツ語で、母はドイツ人、『父語』はチェコ語で、父はドイツ人」³⁾とインタビューアに言われ、母語がドイツ語であることを認めても、自身が何人であるとは決して明言しなかった。ライネロヴァーの自己認識は「ブラハ人」であったといえるであろう。国勢調査や身分証明書などで「民族籍」の表明を強制された時、ライネロヴァーがどう答えたかは興味深い点であるが、もちろん、それは彼女の真のアイデンティティを示すものではない⁴⁾。

現在までにライネロヴァーのほとんどの作品はチェコ語に翻訳されており、生前の彼女は、そのチェコ語訳(オルガ・ヴァロー Olga Walló によるものが多い)に自ら手を入れ、作者公認版としてチェコ語版を出版していた。従って、ドイツ語版とチェコ語版に相違がある場合には、何らかの理由があると考えられる。そのため、本稿では、チェコ語版『私の人生の待合室 Čekárny mého života (Praha: Labyrint, 2007)』との比較も行う。

2. ライネロヴァーの生涯 —— 本作品に関わる点を中心に ——⁵⁾

ライネロヴァーは、第一次世界大戦中の 1916 年、プラハのカルリーン Karlín (Karolinenthal) 地区で生まれた。現在はソコロフスカー Sokolovská 通りとなって

3) Friedrich Schorlemmer, „Vor allem darf man sich nie selbst bemitleiden“. Gespräch mit Lenka Reinerová. 18. März 2003, in idem (Hg.), *Lebenswege. Gespräche mit Zeitzeugen*, Bd. 5, Halle (Saale): Mitteldeutscher Verlag, 2005, S. 215.

4) 従って、筆者は、サルムホーファーがライネロヴァーを「チェコ人」(Salmhofer, *op. cit.*, S. 11) としていることに違和感を覚える。また、ライネロヴァーのアイデンティティについて論じているのにもかかわらず、ドイツとチェコの民族的アイデンティティの問題に触れていないことにも疑問を感じる。

5) ライネロヴァーの、より詳細な経歴、出版された作品については拙稿「レンカ・ライネロヴァーの経歴と作品」『東北ドイツ文学研究』第 50 号, 2007 年, 197-215 ページ参照。また、本節のデータは、稿末の参考文献に基づいている。

いるクラーロフスカー Královská 通り (Königstraße) に住居があった。カルリーンは工場地区で、多くの労働者が住んでいた。ここで、ライネロヴァーは、チェコ語を母語とするユダヤ系の父とドイツ語を母語とするユダヤ系の母のもとで二人の姉妹と共に育った。教育はドイツ語で受けたが、家庭ではチェコ語、ドイツ語の二言語が使用されていた。

ライネロヴァーの両親は金物屋を営んでいたが、1930年代の経済恐慌期に、それを失った。このため、ライネロヴァーは、当時通っていたドイツ系ギムナジウムを15歳の半ばで中退しなければならなかった。

もともと労働者の多いカルリーンで育ち、共産党のメーデーの行列に親しみを感じていたライネロヴァーは、その後、勉学意欲があっても勉学が続けられない不公平さや、社会的不平等、恐慌期のすさまじい失業率に直面して、共産主義者となった。

ギムナジウム中退後、3年間ハルマネツ製紙会社 Harmanecké papírny (現存する1829年創立のスロヴァキアの製紙会社)のプラハ支店に勤務した。子供の頃から演劇好きだったライネロヴァーは、当時、子供たちの演劇活動の指導もした。

1930年代半ばには実家を出て、メラントリフ Melantrich 通りで一人暮らしを始めた。当時は、ドイツからの亡命者たちの新聞『労働者画報 AIZ: Arbeiter-Illustrierte-Zeitung』で働いていた。この新聞の編集者の F. C. ヴァイスコップ F. C. (Franz Carl) Weiskopf を通じて、1935年にエゴン・エルヴィン・キッシュ Egon Erwin Kisch と知り合った。当時、ライネロヴァーは19歳、キッシュは50歳だった。ライネロヴァーは、キッシュの家「2匹の熊亭 U dvou zlatých medvědů」の屋根裏部屋に引っ越した。キッシュはフランス在住だったが、時々はプラハに戻ってきていた。子供のいなかったキッシュ夫妻にとって彼女は実の娘のような存在であった。

1939年初めにヴァイスコップの依頼で、ポトカルパツカー・ルス Podkarpatská Rus (チェコスロヴァキア東部、ルテニア)の取材に来訪した『バルティモア・サン Baltimore Sun』紙のアメリカ人記者の手伝いをした。ドイツがチェコを占領する直前には、この新聞の仕事でルーマニアに出張していた。そして、帰国予定日は1939年3月14日で、まさにその日にチェコスロヴァキアは解体されるのである。情勢が不穏であったため、ライネロヴァーはルーマニアからプラハの妹に電話連絡し、妹は暗にライネロヴァーの身に危険が迫っていることを警告した。ユダヤ人であることと共産黨員という経歴からゲシュタポに狙われたのである。この警告を受けて帰国しなかったため、彼女自身はナチから逃走することができたが、二度と家族と会うことはできなかった。家族や多くの友人は強制収容所で命を落とした。妹は抵抗運動に参加した後、ラーヴェンスブリュック Ravensbrück (ベルリンの北)収容所からアウシュヴィッツ Auschwitz 収容所へ、姉は子供と共にウッチ Łódź (ポーランド)の収容所へ、母はテレジーン Terezín (ボヘミア)収容所からアウシュヴィッツ収容所へ、父はテレジーン収容所へ送られ、死亡した。ホロコーストで命を落と

した親戚は 11 人に及んだ。

前出のアメリカ人記者がライネロヴァーの将来を心配し、通常ユダヤ人には発行されなくなっていたフランスの査証がとれるように尽力してくれたため、ライネロヴァーは、フランスの査証を手に入れていた。そこで、ルーマニアからフランスに入国し、ヴェルサイユで、キッシュ夫妻と同じホテルに滞在した。

ヴァイスコップはチェコスロヴァキアからパリに最初に逃れた人々に属していた。ライネロヴァーは、パリでは、アントニン・ペルツ Antonín Pelc、フランチシェク・ランゲル František Langer、アドルフ・ホフマイステル Adolf Hoffmeister らと交流した。ホフマイステルはモンパルナスに「チェコスロヴァキア文化の家 Maison de la culture tchécoslovaque」を開き、そこに 10 人が引越し、同居した。ライネロヴァーも唯一の女性として彼らと一緒に邸宅に住んだ。そこには毎夜、亡命者たちが集った。政治家のフベルト・リプカ Hubert Ripka やヴラヂミール・クレメンティス Vladimír Clementis など訪れた。この集いは、住人たちがフランス当局によって逮捕されるまで続いた。逮捕 1 週間後、捕らわれた男性たちはラカンテ Lacanté に送られた。

ライネロヴァーも、女性刑務所に入れられた。その刑務所については、作品やインタビューによってル・プティ・ロケット Le Petite Roquette と呼んでいる場合と、メゾン・ドゥ・サン＝ラザール Maison de Saint-Lazare と呼んでいる場合がある。半年間、その独房におかれ、軍事法廷で取調べを受けた。刑務所では、子供のための探偵小説を書いたり、フランス語や英語で読書をしていた。その後、南フランスのリュークロ Rieucros の収容所に送られた。ここは、最後にペタン Philippe Pétain 政権下に入った地域にある。

当時、既に、キッシュやヴァイスコップはメキシコにいたので、彼らがライネロヴァーもメキシコに来られるように尽力した。彼らの活動をアメリカの作家たちも援助した。その当時のメキシコは依然ユダヤ系の移民を受け入れていた稀な国であった。ライネロヴァーは、まず、モロッコまで船で行ったが、その後、サハラ砂漠沿いの収容所に入れられてしまった。収容所の衛生状況などはひどく、死亡者も多かった。この窮地を脱すべく、彼女は、チェコスロヴァキア亡命政府が彼女の身に関心を持っているとか、手術を受けたばかりだとうそをついた。その後、収容所からの脱出に成功し、カサブランカに移り、身分証明書なしにイタリア人夫妻の宿に住みつつ、日雇い仕事で身を養った。黄疸にかかったりもしたものの、ポルトガル船セルパ・ピント Serpa Pinto 号で何とかメキシコに到達することができた。ルーマニアを出発してからこれまでに既に 2 年の月日がたっていた。

メキシコのベラクルス Veracruz で、後に夫となるユーゴスラヴィア出身の医師でユダヤ・ドイツ系作家のテオドル・バルク Theodor Balk (本名フォドル・ドラグティン Fodor Dragutin) とキッシュ夫人が待っていた。メキシコでのライネロヴァーは、キッシュにとっては、故郷プラハの象徴のような存在であり、二人は互いにチェコ語で話しあっていた。

さて、バルクとの結婚式は、メキシコ式に執り行われた。新郎新婦双方に2人ずつの4人の証人がいた。彼女の側は、キッシュとチェコスロヴァキア大使が、彼の側は、アンドレ・シモン André Simon（本名オットー・カッツ Otto Katz）とドイツからの亡命者のカッツが証人となった。二人は、既にプラハで知り合っていた。

ライネロヴァーは、チェコスロヴァキア亡命政府大使館の仕事を得、『メキシコのチェコスロヴァキア El Checoslovaco en México』という雑誌を発行し始めた。終戦後数週間して、メキシコを去り、夫と共にベオグラードに赴いた。そこで、1946年3月に娘が生まれた。

その後、夫は肝臓病を患った。1948年当時のベオグラードでは治療することができず、ライネロヴァーはチェコスロヴァキア大使館を頼った。その48時間後には、バルクはプラハのカレル Karel 広場にある総合病院に入院することができ、4週間後には退院して、カルロヴィ・ヴァリ Karlovy Vary (Karlsbad) で療養するようになった。それまで、ライネロヴァー母子はベオグラードに留まっていたが、カルロヴィ・ヴァリのバルクを見舞った。まさにその時、ユーゴスラヴィアがコミンフォルムを除名される問題が生じた。結局、バルクはユーゴスラヴィアの状況に対して反対を表明し、一家はチェコスロヴァキアに残った。第二次世界大戦後のチェコスロヴァキアは、反ドイツ的風潮に満ちていたが、ライネロヴァーがドイツ系であることで攻撃されることはなかった。また、彼女は、1948年12月に最初の癌の手術を受けたが、この手術はベオグラードでは不可能なものであった。

病気から回復後、チェコスロヴァキア放送の海外放送部門で働いた。1952年初め、秘密警察 Státní bezpečnost に逮捕、拘禁された。スターリン主義の粛清の犠牲となり、15ヶ月、取調べ房に収容された。拘禁の理由は、本人が質問しても明かされなかった。収容されたルジニェ Ruzyně（プラハ郊外）の監獄の看守は男性で、女性職員が対応していたフランスとは違っていた。

釈放されたのは、1953年、スターリン Иосиф Виссарионович Сталин（1953年3月5日）もゴットヴァルト Klement Gottwald（1953年3月14日）も死に、ベリヤ Лаврентий Павлович Берия が処刑（1953年12月23日）されてからである。その間に、夫と子供もプラハを追放されて、ボヘミアのパルドゥビツェ Pardubice に住んでいた。二人の居所を探し当てたライネロヴァーは、そのままそこで3年間暮らした。労働事務所の紹介で、ガラス・磁器会社に職を得た。家庭用消費物資地方企業 ガラス・磁器工場商品見本部主任 Vedoucí vzorkovny sortimentu sklo a porcelán závodu krajského podniku pro spotřební zboží pro domácnost という長い肩書きでの仕事だった。バルクは研究所実験室の仕事をしていたが、その収入だけでは家族が暮らすことはできなかったからである。

プラハに戻ってからは、外国語学校を通して、通訳の仕事を得ようとしたが、いつもうまくいかなかった。最終決定時にだめになっていることを知ったため、内務省に赴いて、直談判し、仕事ができるようになった。1950年代末からオルビス Orbis

出版社のドイツ語読者向け雑誌編集の仕事をした。3週間後、共産党活動家が彼女の仕事場にやってきて、編集部を追い出されそうになったが、編集長に直訴したところ、編集長が擁護してくれた。この編集長は作家パヴェル・コホウト Pavel Kohout の父であった。また、当時から翻訳の仕事も始めた。

1960年代は、ドイツ語誌『ヨーロッパの中心で Im Herzen Europas』の編集長として働いた。1964年には、名誉回復され、共産党への再入党を誘われ、それを受け入れた。ただ、この時期、反ユダヤ主義の嫌がらせも経験している。1960年代初めに、一家の郵便受けにダビデの星を書かれたり、娘が学校でいじめられたりした。

1968年、「プラハの春」への軍事介入以後、再び共産党から追放され、自分の名での翻訳、出版を禁じられたが、6つの言語（ドイツ語、チェコ語、英語、フランス語、スペイン語、セルボ・クロアチア語）ができたことから、匿名の同時通訳の仕事は得ることができた。また、1968年夏の軍事介入の時、将来の夫となるボーイ・フレンドと4週間のイギリス旅行中だった娘は、そのままイギリスに移住し、帰らなかった。当時、娘は、プラハの美術工芸大学（UMPRUM）の学生だった。娘は現在もイギリスでライネロヴァーの孫娘と暮らしている。その後、ライネロヴァーは、早めに年金生活に入り、年金生活者として⁶⁾娘を訪問できるようになった。1974年、夫のバルクが亡くなったため、唯一の家族となった娘を訪問するため、憲章77 Charta 77⁷⁾には署名しなかった。

1983年から東ベルリンのアウフバウ Aufbau 出版社から作品が発行され始めた。この出版社は東ドイツ作家同盟 Schriftstellerverband der DDR の出版社であったが、ライネロヴァーが直接出版契約を結ぶことは当時の制度上不可能だったので、外国の出版社に対する代理機関であるチェコスロヴァキアのディリア DILIA を経由した。ディリアは、東ドイツから出版依頼がきたライネロヴァーの原稿の内容をチェックしようとしたが、それがドイツ語なのに驚いたという。

この頃から、少しずつ、自分の名での翻訳・出版が国内でも可能になってくるが⁸⁾、創作作品が出版されることはなかった。結局、再度国内で作品が出版されるようになったのは、社会主義政権崩壊後の1991年のことだった。その後、ドイツでもチェコでも、作品の出版が進んだ。ドイツでは、1999年に、ワイマールでシラー財団からシラー指輪賞、2003年にゲーテ・メダルを受賞し、チェコでは、2001年に前大統領ヴァーツラフ・ハヴェル Václav Havel から功労メダルを受け、2002年には、プラハ市名誉市民となった。

90歳を過ぎても、ライネロヴァーは、自立して一人暮らしを続け、旺盛に執筆・

6) 旧社会主義国では、生産に携わらない年金生活者は、移住しても国家の損失にならず、むしろ年金が節約できるため、外国旅行が認められる例が多かった。

7) 1977年1月1日に公表された反体制運動の文書。

8) Pešina, Jaroslav, *Der Hohenfuther Meister*, Prag: Odeon, 1983 や Neummanová, Miloslava, *Vincent van Gogh: Zeichnungen*, Prag: Odeon, 1987の独訳者として名前が明記されている。

翻訳活動を続けた。最晩年の仕事としては、プラハ・ドイツ語作家文学館 Prager Literaturhaus deutschsprachiger Autoren/Pražský literární dům autorů německého jazyka 設立準備委員会の活動がある。この文学館は、チェコにおいてドイツ語で創作活動を行った作家達の記念館で、2004年に記念館設立のための基金が組織され、ライネロヴァーは名誉総裁を務めた。現在、文学館は、プラハ中心部に位置し、一般の人々や子供たちのための文学紹介の夕べや、チェコや外国の作家のための奨学金給付、多文化社会の推進のための活動を行うと同時に、図書館を一般に開放している。

2007年夏に足を骨折して以来、ライネロヴァーは車椅子を使用するようになった。そのため、2008年1月25日、ドイツ連邦議会でナチズム犠牲者追悼の日に向けて演説する予定であったが、自らベルリンへ赴くことはできなかった。しかし、3月31日、プラハでのエゴン・エルヴィン・キッシュ・シンポジウムには姿を見せ、死の1週間前には誕生祝いの会に参加した。6月27日、住み慣れたプラハのスミーホフ Smíchov 地区⁹⁾の自宅アパートで亡くなった。プラハ市博物館 Muzeum hlavního města Prahy におけるプラハのカフェに関する展覧会の会期中で、18日に彼女の作品の朗読会が営まれた直後であった。7月4日プラハ・ストラシュニツェ Strašnice の火葬場大斎場で葬儀が営まれ、新ユダヤ墓地に埋葬された。ライネロヴァーは、自分のユダヤ性や宗教性についてはむしろ否定的で、何者にも帰属したくないと思っていたが、80歳になったとき、ユダヤ教団に登録していたのである¹⁰⁾。その理由としてホロコーストの存在をあげていた。

3. 遺作『次の時の秘密』

さて、この作品では、「待つこと」及び「待合室」をテーマに様々な思い出や思いが綴られている。ドイツ語版では、それぞれ数行ずつ間をあけた24部に分けられている中編である。同じ2007年の出版だがドイツ語版より後に出たチェコ語訳では、表題が『私の人生の待合室』となっており、区切りの付け方や分けられている部数も異なり、テキストにも若干の違いがある。チェコ語訳は、ライネロヴァーの多くの作品を翻訳しているオルガ・ヴァローによる。

以下では順次作品の内容の検討を行うが、()の数字はドイツ語版の24部に対して、[]の数字はチェコ語版の25部に対して筆者が便宜的に付したものである。また、ドイツ語についてライネロヴァーは、旧正書法で記述しているので、引用文もそのままである。

9) スミーホフもカルリーン同様、労働者の多い下町で、その立地をライネロヴァーは気に入っていたようである。

10) „Kavárna snů Lenky Reinerové (レンカ・ライネロヴァーの夢のカフェ)“, *Vikend. Hospodářské noviny* (経済新聞週末版), 47 (2003)-32, str.8.

(1) / [1]

(1)の最初の文が作品全体としても最初の文にあたる。

Warten ist ein ganz besonderer Zustand, in den man im Leben, gewollt oder ungewollt, immer wieder gerät, der uns von unserer ersten Stunde an begleitet, gut sein kann oder schlimm, banal oder ganz außerordentlich, ein Alpdruck oder ein aus Sehnsucht gesponnener Traum. (S. 5)

〔和訳〕

待つことは特別な状態だ。望もうが望ままいが、人生では何度もその状態になる。待つことは、生まれてからすぐに私達と一緒にある。よいことかもしれないし悪いことかもしれない、ありふれたことかもしれないし特別なことかもしれない、悪夢かもしれないし憧れから生まれた夢かもしれない。

この冒頭の文は、上記引用のようにドイツ語版では一文で書かれているが、下記のようにチェコ語訳では三つの文に分けられ、最後の文（上記和訳の、「よいことかもしれないし」以下にあたる。）は疑問文になっている。

Čekání je docela zvláštní stav, do něhož se člověk – chtě nechtě – stále znovu dostává. Čekání nás provází od prvních hodin života. Bude dobrý či špatný, banální, nebo zcela výmečný, noční můra, nebo z touhy utkány sen? (str. 7)

それからライネロヴァーは母に思いを馳せる。母は、二度目か三度目の出産（チェコ語訳では三度目の出産）の時には息子の誕生を望んだかもしれないが、結局3人の娘を得た。そして、末娘はアウシュヴィッツ＝ビルケナウ（チェコ語訳ではアウシュヴィッツ）で死を迎えた。

(1)の最後で「待つこと」から「待合室」に話題が転じる。

Ich jedoch glaube, daß zum Beispiel Wartezimmer in Entbindungsheimen zu den hoffnungsvollsten, vielversprechendsten, auch dramatischsten Aufenthaltsräumlichkeiten in unserem Dasein zählen. (S. 6)

〔和訳〕

しかし例えば産院の待合室は、私達の生涯で最も多くの希望があり、最も多くの約束があり、そして最も劇的な滞在場所であると思う。

チェコ語訳ではこの(1)=[1]と最後の(24)=[25]が、独立したページにおかれており、導入と結部としての効果がより大きくなっている。

(2)-1 / [2]

(2)は、(1)の最後に話題になった産院の待合室に関してである。ドイツ語版では一つにまとまっているが、チェコ語訳ではエピソード毎に三部 ([2]~[4]) に分けられている。

Das Wartezimmer der Gebäranstalt in der jugoslawischen Hauptstadt Belgrad, in dem ich wenige Monate nach dem Ende des zweiten Weltkrieges meiner Niederkunft entgegenseh, war eigentlich gar kein Wartezimmer im wahren Sinne des Wortes. Es war ein Korridor mit fest verschlossenen, dicht verhangenen Fenstern und kärglich mit einigen wenigen Glühbirnen beleuchtet. (S. 6)

〔和訳〕

ユーゴスラヴィアの首都ベオグラードの産院の待合室，そこで私は第二次世界大戦が終わって数ヵ月後に出産を待っていたのだが，それは文字通りの意味での待合室ではなかった。そこは堅く閉ざされ厚いカーテンの下げられた窓がある，つましく少しだけの電球で照らされた廊下だったのである。

1946年3月の雪の嵐の日のことで、出産を待つ中でライネロヴァーは、フランクリン・ルーズベルト Franklin Delano Roosevelt 大統領夫人アナ・エレノア Anna Eleanor Roosevelt のエピソードに思いを馳せ、娘のアナを授かった。大統領夫人の名にちなんだのであろうか。

(2)-2 / [3]

上述の「待合廊下」と設備の整った待合室について語った後、人生の待合室について述べる。

Wenn man durch einen Zufall an einem solchen Wartezimmer im Bahnhof des Lebens vorbeikommt, wird man unwillkürlich von Wehmut erfaßt, hier nicht auch ein funkelnagelneues Lebewesen erwarten zu dürfen. (S. 10)

〔和訳〕

たまたまそのような人生の駅の待合室に來合わせたら，ここでは新しい生き物を受け取ってはならないのだと，知らず知らずに悲哀にかられる。

(2)-3 / [4]

第二次世界大戦期の亡命時代のエピソードである。モロッコのカサブランカ近くのシディ・エル・アジャチ Sidi-el-Ajachi 強制収容所に収容されていたライネロヴァーは、「人を殺した」という不思議な10歳ぐらいの男の子と出会った。

もう一つのエピソードは、メキシコで友人関係になったインディオの女性マリア

Maria に関してである。マリアは、エウジェニオ Eugenio と同棲しており、二人の間の子フェリペ Felipe が生まれる。マリアに頼まれてラウネロヴァーはフェリペの洗礼の代母となるが、その際、マリアに結婚の意思を問うたところ、彼女には全くその気がないことに驚かされる。また、ライネロヴァーがユダヤ系であることをマリアは知らずに代母を頼んだのかどうかは不明であるが、いずれにせよライネロヴァー自身はユダヤ系であっても洗礼の代母となることを厭わなかったことになる。

(3) / [5]

(3)は、(2)から駅の待合室というテーマでつながる。

Wartesäle in Bahnhöfen lassen mich jedesmal ein wenig erschauern. Sie sind für mich vor allem Orte des Abschiednehmens. (S. 14)

〔和訳〕

駅の待合室は、いつも私を少々慄然とさせる。そこは私にとっては何よりも別れの場所なのである。

駅の待合室は、なぜ別れの場なのか。ライネロヴァーは、1939年3月のエピソードを語る。プラハのマサリク Masaryk 駅で、彼女は、母、妹、親友と別れ、ルーマニアに旅立った。母は不安にかられていたが、彼女はほんの10日間のしっかりしたアメリカの新聞社との取材旅行なのだからとなだめて、出発した。しかし、それが母と妹との最後の別れとなった。

(4)の最後の文は、最初と同じ「駅の待合室は、いつも私を少々慄然とさせる。(S. 19)」である。

(4) / [6]

しかし、悲しい思い出だけで話をすまさないところが、ライネロヴァーらしいところである。(4)では、同じ乗り物の待合室であっても、つらさの中の光明ともいえる体験が語られる。

シディ・エル・アジャチ強制収容所を釈放されたライネロヴァーは、暑い路上に小屋を見出す。そこには老人が座っており、その小屋がカサブランカ行きのバスの待合所だと教えてくれ、彼女に食べ物を与え、しばらく共に過ごす。バスが到着すると、老人は運転手に彼女が無事カサブランカに到着できるよう頼んでくれる。他人の親切に助けられた思い出である。

(5) / [7]

Was ist eigentlich Warten? Ein Zustand, in den man versetzt wird, den man mitunter selbst wählt, der einem allerdings oft sogar richtig aufgezwungen wird. Warten ist ganz

anders als Erwarten. Man wartet auf einen Menschen, auf ein Transportmittel, eine Nachricht. Aber man erwartet ein Ereignis, eine Änderung im Leben. (S. 24)

〔和訳〕

実のところ待つこととは何だろう？その状態におかれたり、時として自らその状態を選んだり、もちろんしばしばその状態を強制されたりする、そういった状態が待つことだ。待つことは待ちかまえることとは全く別のものだ。人や交通機関やニュースは待つものだが、出来事や人生の変化は待ちかまえるものだ。

(5)では、待つことの定義づけを試みた後、1938年にプラハの著名な解放劇場 Osvobozené divadlo で開演を待っていたときの思い出に話が展開する。

(6) / [8]-1

Gibt es irgendwo auf der Welt Warteräume für den Empfang von Briefen, von guten, aber auch schlechten Nachrichten? (S. 33)

〔和訳〕

世界のどこかに手紙やよいニュースや悪いニュースを受け取るための待合室があるだろうか？

リュークロの収容所での郵便物を待つ場所について語られる。

(7) / [8]-2

チェコ語訳では前と一つにまとめられているが、ドイツ語版では分けられている。カサブランカで局止め郵便を待つ話である。

(8) / [9]

(7)の郵便局から、話題がプラハの中央郵便局の待合ホールに移る。そこで、日本人の若い女性と、この郵便局の地に14世紀にあった庭園や天皇のチェコ訪問などについて語り合う。本題とは外れるが、ライネロヴァーの日本観がうかがえる節を引用しよう。

Einmal saß ich wartend auf einer der Holzbänke neben einem bildhübschen japanischen Mädchen. Ich war an jenem Tag nicht nur mit der Absicht hergekommen, meine Post loszuwerfen. Ich wollte mich diesmal in dem von Menschen verschiedenster Art reichlich besetzten Warteraum ein wenig gründlicher umsehen. Die Besucherin aus dem Land der aufgehenden Sonne neben mir telefonierte mit jemandem mit Hilfe eines winzigen Handys in einem mir unverständlichen Idiom, wahrscheinlich ihrer Muttersprache. (S. 39-40)

〔和訳〕

あるとき私は木のベンチの一つに座って待っていた、隣には絵のようにかわいらしい日本の女の子がいた。その日は、私は郵便物を出すためだけに郵便局へ行ったのではなかった。様々な種類の人間により占められている待合室を少しじっくり見たいと思ったのである。私の隣の日出づる国からの訪問客は誰かと小さな携帯電話で私の理解できない言葉、多分彼女の母語で話していた。

ライネロヴァーの書いているように、プラハの中央郵便局は世界各国からの人々がやってくる人間観察に適切な場所であり、アトリウム風の空間の待合ホールには装飾の美しい壁がある。ライネロヴァーは郵便局での携帯電話使用に特に批判的ではないようだが、実際にはこの待合ホールは携帯電話使用が厳格に禁じられており、使用者がいるとすぐ警備員が飛んでくる。その点でこのエピソードが現実のものかどうか少し疑問が残る。

最後に女の子ではなく若い女性であることがわかる日本人は、「夫を待たしていた」と郵便局から駆け出していく。

(9) / [10]-1

In Wartezimmern profilieren sich die Menschen in versiedene Typen. (S. 45)

〔和訳〕

待合室には様々なタイプの人間の特色が現れる。

ドイツ語版の(9)、(10)と(11)の前半は、チェコ語版では[10]にまとまっている。ドイツ語版の(11)の後半はチェコ語版の[11]になる。

(10) / [10]-2, (11)-1 / [10]-3

医師の待合室に関する語りである。

(11)-2 / [11]

具体的な腫瘍科の待合室でのエピソードが語られる。前章で述べたように、ライネロヴァーは1948年に癌の手術をしているが、50年後に、再発して(?)病院を訪れたのである。

(12) / [12]

結婚のための待合室について語られる。

(13) / [13]

チェコ語訳では[12]と[13]から[15]と[16]の間までのそれぞれの間が行を開けるだ

けでなく3つのアスタリスクで区切られている。

(13)は、2005年7月（チェコ語訳では夏）のロンドンでの同時テロの時にした回想に関するエピソードである。テロ当時、ライネロヴァーはロンドンの娘の家に滞在していた。テロにあった地下鉄やバスの目的地から、孫娘の入学時を思い出し、学校の廊下で孫娘を待った時のエピソードを語っている。

(14)/[14]

メキシコで結婚した時の市庁舎の待合室の思い出に関する語りで、(12)と関連する。

(15)/[15]

(14)の続きの結婚した時の話題で、夫側の証人になったアンドレ・シモンの思い出である。

(16)/[16]

(16)は妻側の証人になったエゴン・エルヴィン・キッシュとチェコスロヴァキアのロンドン亡命政府の外交代表カレル・ヴェンドル Karel Wendl の思い出である。

(17)-1/[17]

(17)で話題は転じ、旅に関係して待つことがテーマとなる。鉄のカーテンがあった時代の、旅行先の入国査証のための各外国公館での待合室についてと、その後チェコスロヴァキアからの出国許可を得るために待つことについてである。

(17)-2/[18]

ドイツ語版では(17)の後半になるが、チェコ語訳では[18]として独立している。空港の待合室に関する語りである。

(18)/[19]

パリのシャルル・ド・ゴール空港のゲート 22 の待合室に関するエピソードである。ライネロヴァーがパリからプラハへの帰途で1週間前に利用したその待合室の天井の一部が崩れ、一人のチェコ婦人が亡くなった¹¹⁾。ところが、パスポートにより特定されたその婦人の家をチェコの警官が訪ねると、本人は健在で、3週間前にパスポートを盗まれたことが判明した。亡くなったのは誰だったのだろうか。

(19)-1/[20]

11) 2004年5月23日の事故のことか。

Was ist eigentlich Warten? Ein Zustand, in dem man sich befindet, den man nur ungern wählt, der allerdings oft nicht zu umgehen ist? Oder eine Bestätigung, von der man sich etwas verspricht, was aber bei weitem nicht immer zutrifft?

〔和訳〕

実のところ待つこととは何だろう？その中に存在し、選ぶのはいやいやながらだが、たいていは避けて通れない状態だろうか？それとも、いつも実現するとはとてもいえないような何か期待されているという確認だろうか？

(19)は(5)と同じ文で始まる。その後、全体主義体制期の物不足の際の「行列で待つこと」というエピソードが語られる。ドイツ語版では、das Warten in einer Menschenschlange (S. 87), die Schlangewartenden (S. 88), das Warten in solch einer Schlange (S. 88) と書き分けられている「行列で待つこと」或いは「行列で待つ人」が、チェコ語訳ではすべて čekání ve frontě と同じ表現になっている (str. 59, 60)。時代が変わり、それまでは例えばバナナのための行列だったものが、外国旅行のための旅行社前の行列に変わる。そして、ギリシャかフランスに旅行しようとして並んでいる女子学生オルガ Olga とのエピソードを語る。

(19)-2 / [21]

ドイツ語版では(19)の後半であるが、チェコ語訳では独立の[21]である。(19)-1 の状況とは逆転して、今ではむしろ外国人が滞在許可を得るためにライネロヴァーの故国でも行列をなす。そして、そのような行列のできる機関には待合室はなく人々は廊下で待つ。そういった待合室のない機関での自らの経験を語る。

(20) / [21]

全く違う待ち時間として、公の場に出る前の待ち時間が語られる。

(21) / [22]

テレビ出演前の待ち時間に話は移る。

(22) / [23]

金融機関で待つことについてである。

(23) / [24]

Warten ist allerdings ein Zustand, der oft, wahrscheinlich allzuoft, problematisch sein kann. Es kommt vor, daß man etwas beginnt und nicht weiß, was dabei herauskommen kann. Und tut es doch, weil man fast immer hofft, daß das gewagte Unternehmen nur mit einem guten Ende ausgehen kann. Und wenn dann alles wirklich glücklich vorbei

ist, vergift man bald seine Unruhe, Verzagtheit und Ungeduld während der bangen und leeren Wartezeit. (S. 116-117)

〔和訳〕

たしかに待つことは、しばしば、おそらくは余りにもしばしば問題のある状態だ。何かを始めたものの、何が生まれるかわからないことが生じる。しかし、大胆な行動がよい結果ばかりを生じさせるのだとほとんどいつも望んでいるので、そのようになる。そしてすべてが本当に幸運のうちに過ぎ去ると、気がかりでむなしい待ち時間の不安や弱気や焦りなど、じきに忘れてしまう。

本作品冒頭の「待つこと」の定義づけや、(5)や(19)の問いかけの答えに戻ってきた。「待つこと」についてフランスでの亡命時代のキッシュ夫妻との関わりとからめて語る。

(24) / [25]

Wir wissen: Uns alle erwartet ein unausweichliches Ende. Aber bis dahin können wir unser Leben mitgestalten, können versuchen, ihm einen Sinn zu geben. (S. 122)

〔和訳〕

私達は知っている：避けられない終わりが私達皆を待ちかまえていることを。しかしそれまで私達は人生をともに形作ることができ、人生に一つの意味を与えることを試みることができる。

Denn auf diese Weise wartet man nicht auf ein endgültiges Ende, sondern auf die erträumte Möglichkeit eines unbekanntes, zweifellos völlig andersartigen Anfangs. (S. 123)

〔和訳〕

このようにして、最終的な最後を待つのではなく、未知の疑いなく全く異なった始まりの夢にみた可能性を待つからである。

ライネロヴァーの生前にこれらの文章を読んだとき、筆者は、彼女が遺言としてこの作品を書いたのだと強く感じた。そして、この最後の文は、彼女の死を知らせるプラハ・ドイツ語作家文学館のホームページのニュースにも、遺言のように引用されている¹²⁾。また、チェコで多くのライネロヴァー作品を出版したラビrint社のヨアヒム・ドヴォジャーク Joachim Dvořák の追悼文にも引用されている¹³⁾。

12) <http://www.prager-literaturhaus.com/?lang=de&q=detail&id=110> (最終アクセス日：2009年3月23日)

13) http://www.prager-literaturhaus.com/userfiles/file/Smutečni%20rec_Dvorak.pdf (最終アクセス日：2009年3月23日)

チェコ語訳版には、[25]の後にドヴォジャークが2007年4月のイースター・マンデーにチェコ語原稿の最終チェックのため、ライネロヴァー宅を訪問した際に、思いついて撮影したライネロヴァーの仕事場や本棚の写真が19葉添えられている。蔵書にはドイツ語、チェコ語、英語、フランス語の書物が見られる。

また、これまでの説明からわかるように、チェコ語訳版の方が、話の区切りのつけ方が理にかなっているようである。チェコ語訳版の方が、後から訳者や編集者と構成を再検討した上で出版されているのではなかろうか。

4. おわりに

ライネロヴァーの最後の作品は、これまでの作品同様自伝的要素とポジティブな生き方のメッセージからなっている。待つことをテーマに、彼女の思い出や考察は、次々と関連する別のエピソードへと展開していくが、常に一つの流れに戻ってくるようである。彼女の語り手としての熟達さが現れている。

第二次世界大戦中のフランス、北アフリカ、メキシコへの亡命中の思い出は、ライネロヴァーの故郷喪失者としての時代を語るものである。ユダヤ人として受けた理不尽な運命についても表現されている。また、この作品におけるライネロヴァーは、ナチによる迫害を描き、全体主義時代のチェコスロヴァキアのエピソードを語っているため、記述言語はドイツ語であるのにもかかわらず、チェコ人作家の立場を反映しているように見える。特に、第二次世界大戦後のチェコスロヴァキアのエピソードに関する記述では、ドイツ語原文の方がチェコ語訳より表現しづらそうなどころも見受けられ、ドイツ文化の失われたチェコスロヴァキアでドイツ語で書く作家の難しさが伺われる。また、翻訳者が介在したチェコ語での表現の方が、作者自身、より客観的な立場に立てたのかもしれない。

人間は誰しも死を待っているわけだが、それを無為に待つのではなく、それまで有意義に生きることができ、死は終わりではなく、それは新たな始まりであるという考えは宗教家の言葉のように、残された私達に語りかけられる。波乱万丈の一生を、只管ポジティブに生き抜いたライネロヴァーが最終的に到達した境地を述べた最後の言葉は、彼女のモットーとして今後も受け入れられるだろう。

その後、2009年になって、これまでチェコ語版の出ていなかった旧作2編が『乗船券 *Lodní lístek*』としてチェコで出版され、没後なおライネロヴァーへの関心は続いている。

主要参考文献（本文中にあげなかったもの）

Dědek, Honza, „Barvy jednoho života (ある人生の色)“, *Reflex* (反映), 37/2005, str. 20-27.

- Doerrz, Martin, Lenka Reinerová, „Ich hatte die Vision einer gerechteren Ordnung“, in idem, „*Nirgendwo und überall zu Haus*“. *Gespräche mit Überlebenden des Holocaust*, München: Deutsche Verlags-Anstalt, 2006, S. 194-203.
- Helbig, Axel, „In Versailles, in meinem Dachzimmer. Gespräch mit Lenka Reinerová“, in idem., *Der eigene Ton. Gespräche mit Dichtern*, Leipzig: Edition Erata-Leipziger Literaturverlag, 2007, S. 258-266.
- Langkramerová, Tereza, „Lenka Reinerová“, in: *V. studentský seminář k problematice dějin ženského emancipačního hnutí ve 20. století* (第5回20世紀女性解放運動史問題学生セミナー論集), Praha: Ústav hospodářských a sociálních dějin Filozofické fakulty Univerzity Karlovy, 1999, str. 3-12.
- Nováková, Martina, „Im Gespräch mit Lenka Reinerová“, *Listy* (新聞), roč. 36 (2006)-1, str. 63-65.
- „Putování 20. stoletím. Rozhovor Ondřeje Horáka s Lenkou Reinerovou (20世紀逍遙, オン DJ ェ イ ・ ホ ラ ー ク に よ る レ ン カ ・ ラ イ ネ ロ ヴ ェ ー ・ イ ン タ ビ ュ ー)“, *Tvar. Literální obtýdeník* (形, 文学隔週刊紙), 5/2005, str. 1.
- Škarýd, Milan, „Pulovr Lenky Reinerové stále hoří (レンカ・ライネロヴァーのセーターはいつも燃えている)“, *Xantypa*, roč. 4 (1998), č. 8, str. 20-23, 116-117.
- Zahradničková, Hana, „Vyprávět, dokud ještě mohu. Kisch nebyl žurivý, ale pečlivý reportér, vzpomíná spisovatelka Lenka Reinerová (まだできる限り語り続ける。キッシュは感情的でなく注意深いレポーターだった, と作家レンカ・ライネロヴァーは回想する)“, *Týden* (週) 25/2001, str. 45.

Letzte Botschaften von Lenka Reinerová

— Vergleich zwischen der deutschen und der tschechischen Ausgabe
ihres letzten Werkes —

Yukino SATO

Prag, die Hauptstadt der Tschechischen Republik, war vor dem Zweiten Weltkrieg eine multikulturelle Stadt, die von Tschechen, Deutschen und Juden bewohnt wurde. Zum Beispiel lebten dort Franz Kafka und Rainer Maria Rilke. Aber diese kulturelle Tradition ist schon lange vergangen. Der Holocaust und die Vertreibung der Deutschen nach dem Zweiten Weltkrieg haben sie zerstört.

Die letzte Person dieser Tradition war Lenka Reinerová, die auch die letzte deutschsprachige Prager Autorin genannt wird. Sie wurde 1916 in Prag geboren und ist im Jahr 2008 dort gestorben. Sie war lange Zeit nicht sehr bekannt und erst ab den Neunziger Jahren des vergangenen Jahrhunderts wurde ihre Werke häufig veröffentlicht. Studien zu ihren Werken begannen erst in diesem Jahrhundert.

Sie stammte aus einer jüdischen Familie, aber sie war nicht religiös und erst in ihren späteren Jahren ließ sie sich in die Jüdische Gemeinde einschreiben. In ihrer Familie wurde sowohl Deutsch als auch Tschechisch gesprochen, weil die Sprache ihrer Mutter Deutsch war und die ihres Vaters Tschechisch. Infolgedessen ist sie zweisprachig aufgewachsen.

Ihre Familie wohnte im Stadtteil Karolinenthal (Karlín), wo viele Arbeiter lebten. Aufgrund der Einflüsse durch dieses Umfeld wurde sie Kommunistin, obwohl ihre Familie bürgerlich war. Als sie Gymnasiastin war, verlor ihr Vater seine Firma und sie musste ihr Studium aufgeben. Sie begann als Journalistin zu arbeiten und wohnte in der Melantlichgasse, wo auch Egon Erwin Kisch seine Wohnung hatte. In der zweiten Hälfte der dreißiger Jahre hatte sie viele Beziehungen zu deutschen und tschechischen Intellektuellen.

Nach der Zerschlagung der Tschechoslowakei im Jahr 1939 musste sie aufgrund der Pogrome und ihrer politischen Überzeugung ihre Heimat verlassen. All ihre Familienmitglieder kamen später in den Konzentrationslagern um ihr Leben. Sie überlebte als einzige.

Nach ihrer Flucht ging sie zunächst nach Frankreich und wurde dort verhaftet und in einem Lager interniert. Mit Hilfe amerikanischer Schriftsteller konnte sie jedoch

nach Mexico emigrieren. Dort heiratete sie Theodor Balk (Fodor Dragutin), einen Schriftsteller und Arzt aus Jugoslawien.

Nach dem Zweiten Weltkrieg kehrten beide nach Europa zurück und wohnten in Belgrad. Sie brachte dort eine Tochter zur Welt. Im Jahr 1948 ging sie zurück nach Prag. In den Fünfziger Jahren kam sie in Untersuchungshaft und blieb dort fünfzehn Monate. Sie war ein Opfer der stalinistischen Säuberungen. Erst im Jahr 1964 wurde sie rehabilitiert.

Das Ende des Prager Frühlings bedeutete für sie wieder eine schwierige Zeit. Sie wurde aus der Kommunistischen Partei ausgeschlossen und durfte nicht weiter publizieren. Interessanterweise konnte sie jedoch in den achtziger Jahren des letzten Jahrhunderts in der DDR ihre Werke veröffentlichen.

Die Samtene Revolution veränderte ihre Situation. Sie publizierte viele Bücher auf deutsch und tschechisch. Normalerweise schreibt sie auf deutsch und ihre Werke werden ins Tschechische übersetzt. Sie lektoriert und autorisiert die Übersetzungen selbst. Seit 2004 arbeitete sie für das Prager Literaturhaus deutschsprachiger Autoren.

Das Geheimnis der nächsten Minuten ist das letzte Werk von Lenka Reinerová. In diesem Artikel analysiere ich dieses Werk und versuche ihre letzten Botschaften abzulesen. Ich vergleiche es mit der tschechischen Ausgabe *Čekárny mého života*. Hauptthema dieses Werkes ist „Warten“. Sie erinnerte sich an ihr Leben. Alles hing mit „Warten“ zusammen. Es scheint, dass es einen großen Strom in ihrem Leben gab.

Manchmal sieht die tschechische Ausgabe ungekünstelter und rationaler aus, als die deutsche Ausgabe. Vielleicht war die Autorin objektiver, als sie die tschechische Ausgabe vorbereitete.

Wir wissen: Uns alle erwartet ein unausweichliches Ende. Aber bis dahin können wir unser Leben mitgestalten, können versuchen, ihm einen Sinn zu geben...

Denn auf diese Weise wartet man nicht auf ein endgültiges Ende, sondern auf die erträumte Möglichkeit eines unbekanntem, zweifellos völlig andersartigen Anfangs. (*Das Geheimnis der nächsten Minuten*, S. 122-123)

Diese sind ihre letzten Botschaften. Sie war sehr positiv bis ans Ende ihres Lebens.